

■ PCN だより

PCN Volume 69, Number 12 の紹介

Psychiatry and Clinical Neurosciences, 69 (12) には, PCN Frontier Review が 1 本, Regular Article が 5 本掲載されている。国内からの論文は著者による日本語抄録を, 海外からの論文は PCN 編集委員会の翻訳による日本語抄録を紹介する。

(国内からの論文)

PCN Frontier Review

1. Generalized social anxiety disorder: A still-neglected anxiety disorder 3 decades since Liebowitz's review

*T. Nagata**, *F. Suzuki* and *A. R. Teo*

*Mental Health Clinic of Dr Nagata in Nanba, Osaka, Japan

全般性社交不安障害, いまだ見過ごされ続け

Liebowitz (1985) の総説で social anxiety disorder (SAD) が行動療法家しか知らない “a neglected anxiety disorder” として紹介され, 単なる恐怖症の一亜型から, 回避性パーソナリティ障害までも含むように概念が拡大した。それから 30 年が経った現在でも, 有病率の高さとは対照的に専門家以外には十分に理解されていない現状がある。本総説では SAD, 特に全般性 SAD に関して, 概念の拡大, 変遷, 定義, 疫学, 生物学基盤, 治療に関して検討した。その結果, 生物学的側面をはじめとする数多くの研究がなされ, また日本をはじめとする東アジアでは対人恐怖症が注目されてきた。それまで欧米での関心は低かったが, SAD が全般性 SAD へと概念が拡大した結果, 東西の概念の融合の可能性が生まれた。全般性 SAD の亜型分類は廃止されたが, 治療的観点から全般性 SAD とスピーチ恐怖症を同列に扱うことはできず, その臨床的重要性は変わっていない。症候論, 診断閾値, 生物学的側面, 治療などの面で, まだ多くのことが未解決のままであり, 今後のさらなる研究が待たれる。

Regular Article

1. Clinical impact of ^{11}C -Pittsburgh compound-B positron emission tomography carried out in addition to magnetic resonance imaging and single-photon emission computed tomography on the diagnosis of Alzheimer's disease in patients with dementia and mild cognitive impairment

*Y. Omachi**, *K. Ito*, *K. Arima*, *H. Matsuda*, *Y. Nakata*, *M. Sakata*, *N. Sato*, *K. Nakagome* and *N. Motohashi*

*Department of Psychiatry, National Center of Neurology and Psychiatry, Tokyo, Japan

認知症および軽度認知障害患者のアルツハイマー病診断において MRI と SPECT に ^{11}C -PiB PET を追加することによる臨床的影響

【目的】アルツハイマー病 (AD) と軽度認知障害 (MCI) の通常の診断手順に ^{11}C -PiB PET を追加することによる臨床的影響を検討し, NIA-AA 臨床診断基準と研究用診断基準の診断の差異を評価した。【方法】臨床診断基準に基づき診断した患者 85 人を対象に, 神経細胞障害 (NI) 評価のため MRI と SPECT を施行, その後アミロイド評価のため ^{11}C -PiB PET を施行し研究用診断基準に基づき再診断した。【結果】Probable AD dementia (ProAD) 患者 40 人中 37 人が NI 陽性, 29 人が ^{11}C -PiB 陽性であった。最終的に NI および ^{11}C -PiB 陽性の 27 人が “ProAD with high level of evidence of the AD pathophysiological process” の研究用診断に分類された。Possible AD dementia (PosAD) 患者 20 人中 17 人が NI 陽性であった。このうち, NI および ^{11}C -PiB 陽性の 6 人が “PosAD with evidence of the AD pathophysiological process” の研究用診断となった。MCI 患者 25 人中 18 人が NI 陽性, 13 人が ^{11}C -PiB 陽性であった。この中で, NI および ^{11}C -PiB 陽性の 10 人が “MCI due to AD-high likelihood” の研究用診断

となった。【結論】本研究では臨床診断基準と研究用診断基準の診断一致は高いとはいえなかった。特に診断が不確実な患者において¹¹C-PiB PET は診断に影響を及ぼすと考えられた。

2. Effectiveness of group cognitive behavioral therapy for somatoform pain disorder patients in Japan : A preliminary non-case-control study

A. Yoshino*, Y. Okamoto, M. Doi, M. Horikoshi, K. Oshita, R. Nakamura, N. Otsuru, S. Yoshimura, K. Tanaka, K. Takagaki, R. Jinnin, H. Yamashita, M. Kawamoto and S. Yamawaki

*Department of Psychiatry and Neurosciences, Division of Frontier Graduate School of Biomedical Sciences, Hiroshima University, Hiroshima, Japan

疼痛性障害に対する集団認知行動療法の治療効果について

【目的】疼痛性障害は治療に難渋することが多いとされ、薬物治療のみならず、心理社会的治療が必要と考えられている。われわれは2011年から疼痛性障害患者に対する集団認知行動療法を行っており、これまでの治療成績について長期的な効果も含めて報告する。

【方法】広島大学病院麻酔科、歯科麻酔科、整形外科などの診療科より紹介された患者を対象にプログラムを週に1回90分、合計12回行った。評価スケールは痛みのVAS (Visual analog scale), SF-MPQ (Short-form McGill pain questionnaire), BDI, STAI, SF-36, PCS (Pain catastrophizing scale) とし、それぞれ待機期間、治療直前、治療直後、治療1年後に測定した。解析はSPSS ver21を使用し、intent-to-treat解析とした。本研究は広島大学倫理委員会にて承認されたプロトコールに従い、書面にて説明同意を行っている。プライバシーに関する守秘義務を遵守し、匿名性の保持に十分な配慮をした。【結果】これまで34名の疼痛性障害患者(平均年齢52.5歳、女性22名)が治療に参加し32名が治療を完遂した。疼痛スケール(VAS, SF-MPQ, PCS; とともに $P<0.001$)、心理社会的スケール(BDI; $P<0.01$, SF-36 [日常生活機能(身体)]; $P<0.05$, など)とも治療後に有意な改善を認めていた。また1年経過した20名においても、VAS, PCS, BDI, SF-36などの治療効果が維持されていた

($P<0.05$)。【結論】疼痛、抑うつ、不安、社会機能の指標は改善を表しており、良好な治療成績が得られたことより、疼痛性障害における認知行動療法の有用性が示唆された。今後引き続き調査を継続する予定である。

3. Facial expression perception correlates with verbal working memory function in schizophrenia

K. Hagiya*, T. Sumiyoshi, A. Kanie, S. Pu, K. Kaneko, T. Mogami, S. Oshima, S-i. Niwa, A. Inagaki, E. Ikebuchi, A. Kikuchi, S. Yamasaki, K. Iwata and K. Nakagome

*Department of Psychiatry, National Center of Neurology and Psychiatry, Tokyo, Japan

統合失調症における表情認知と言語性ワーキングメモリの関連

【目的】統合失調症の社会認知機能障害は社会的転帰と密接に関連しており、なかでも表情認知障害が多く、先行研究で報告されている。われわれは日本人の顔写真を用いた表情認知課題を使用して、その他の社会認知(心の理論など)や神経認知機能との関連について統合失調症患者を対象に検討した。【方法】DSM-IV-TRの統合失調症の診断基準を満たす患者52名(平均年齢 38.1 ± 10.8 歳)、および健常者53名(平均年齢 37.8 ± 10.2 歳)に、表情認知検査(Facial Emotion Selection Test: FEST)、その他の社会認知検査(ヒント課題およびSocial Cognition Screening Questionnaire: SCSQ)、神経認知検査(Brief Assessment of Cognition in Schizophrenia: BACS)を実施した。【結果】患者の表情認知の得点は健常者よりも低かった。さらに、統合失調症患者において、表情認知はBACS下位項目の注意・処理速度、ヒント課題、SCSQ下位項目の言語性ワーキングメモリ、メタ認知と正の相関を示した。また、ステップワイズ法による重回帰分析において、言語性ワーキングメモリが表情認知を予測する結果が得られた。【結論】表情認知はワーキングメモリと認知資源を共有している可能性が示唆された。

(海外からの論文)

Regular Article

1. Clinical manifestations of pediatric obstructive sleep apnea syndrome : Clinical utility of the Chinese-version Obstructive Sleep Apnea Questionnaire-18

Y-S. Huang*, F-M. Hwang, C-H. Lin, L-A. Lee, P-Y. Huang and S-T. Chiu

*Department of Child Psychiatry and Sleep Center, Chang Gung Memorial Hospital, Taoyuan, Taiwan

小児閉塞性睡眠時無呼吸症候群の臨床症状：中国版閉塞性睡眠時無呼吸質問票-18の臨床的有用性

【目的】小児期の閉塞性睡眠時無呼吸症候群 (OSA) は、小児の身体的健康のみならず精神発達、行動障害および学習障害にも影響する。よって早期診断が重要となる一方、睡眠ポリグラフィの評価尺度が求められている。閉塞性睡眠時無呼吸質問票-18 (OSA-18) は OSA のスクリーニング用にデザインされたもので、信頼性と妥当性が高い。本試験の目的は中国版 OSA-18 を検証し、台湾の小児において症状の発現頻度を分析し、OSA の最もよくみられる症状を見出すことであった。【方法】中国民族における OSA-18 を検証し、質問票の感度を示すため治療転帰を比較した。信頼性を確かめるため、保護者が4週間隔で2回、質問票に記入した。検証試験では88例の OSA 小児を対象とした。OSA-18 および追跡調査の睡眠ポリグラフィは、アデノイド口蓋扁桃摘出術の術前と6ヵ月後に実施した。【結果】試験の結果、OSA-18 の優れた信頼性 ($r=0.84$) が示された。OSA-18 と無呼吸・低呼吸指数 ($r=0.29$) および低呼吸指数 ($r=0.29$) との間にそれぞれ統計学的に有意な相関関係が認められた。生活の質 (QOL) については無呼吸指数 ($r=0.43$)、中枢性睡眠時無呼吸回数 ($r=0.50$)、および混合性睡眠時無呼吸回数 ($r=0.36$) との間にそれぞれ有意な相関関係を示した。6~12歳までの小児 OSA を検出する OSA-18 合計スコアのカットオフ値は66であった。小児 OSA によくみられる症状は、短い注意維持時間、大きないびき、保護者が子どもの健康に不安を抱く、寝起きが悪い、口で呼吸するであった。【結論】本試験の結

果から中国版 OSA-18 は信頼性および妥当性の高い尺度であることが認められた。また、質問票ではアデノイド口蓋扁桃摘出術後の小児の QOL 向上も示された。

2. Proton magnetic resonance spectroscopy revealed differences in the glutamate+glutamine/creatine ratio of the anterior cingulate cortex between healthy and pediatric post-traumatic stress disorder patients diagnosed after 2008 Wenchuan earthquake

Z-Y. Yang*, H. Quan, Z-L. Peng, Y. Zhong, Z-J. Tan and Q-Y. Gong

*Laboratory of Biological & Medical Physics and Key Laboratory of Artificial Micro-& Nano-structures of Ministry of Education, School of Physics and Technology, Wuhan University, Wuhan, China

2008年汶川地震後に心的外傷後ストレス障害と診断された小児患者と健康な被験者間の前帯状皮質におけるグルタミン酸+グルタミン/クレアチン比の相違を陽子磁気共鳴分光法により解明

【目的】地震は常に心的外傷後ストレス障害 (PTSD) のような様々な精神的問題をもつ10代の若者を生み出す。我々は、地震後の現行症と寛解期の小児 PTSD 患者および健常対照間の神経化学の相違の解明を目的とし、これら10代の若者における代謝物を調査した。【方法】21例の健常被験者、10例の PTSD 患者および23例の寛解期被験者を対象に、前帯状皮質 (ACC) での陽子磁気共鳴分光法を実施した。【結果】PTSD 患者では寛解期患者と比較し ACC のグルタミン酸+グルタミン/クレアチン (Glx/Cr) 濃度比が有意に低く (1.15 ± 0.14 vs 1.37 ± 0.08 , $P=0.047$)、さらに寛解期被験者では健常対照と比較し ACC の Glx/Cr 濃度比が有意に低かった (1.37 ± 0.08 vs 1.59 ± 0.10 , $P=0.045$)。【結論】本試験結果から、ACC の Glx/Cr 比は健常被験者と小児 PTSD 患者の鑑別だけでなく、現行の小児 PTSD 患者と寛解期にある患者との鑑別にも使用できると考えられる。Glx/Cr 比の変化は現行 PTSD 期の脳機能障害および寛解期の回復によって生じる可能性がある。